

〔藩翰譜石川<sup>十二下</sup>〕三方が原の合戦の時、數正<sup>石織田殿長</sup>の加勢として、遠江の國に向ふ、武田入道<sup>信</sup>、遠江の國に向ふと聞て、取て返す、昔美濃の守護土岐が國に在りといふ淺岡の何某は弓矢取てさる古兵と聞えしかば、數正彼が許に行き向て、此度本國に歸り候はゞ、定て討死仕るべし、數正小兵には候へども、弓引矢放さんやうは、かたの如く習て候ひき、然るに田舎に生れ、育ちたる身の悲しさは、軍陣に臨まん時、躓さし緒むすぶやうは、いまだ學びさむらはず、されば最期に、何某は弓矢の骨法知らざりきと、かたきに笑はれ候はん事、骸の上の耻辱、何事か是に過ぐべき、おはれ御指南を受けばやとて、傳へてけり、夜を日に繼で馳せ下る程に、遂に其日の戦にぞ逢ひたりける、武田大膳大夫入道、この事を傳へ聞て、武士の家に生れて、其道を嗜む事、誰も斯くこそ有べけれ、あつはれ徳川が弓矢侮りにくしとて、感じ給ふ事、斜ならず、

〔大三川志<sup>十四</sup>〕天正三年御年三十四

夜竊ニ二俣ヲ襲ント、軍ヲ出シ給フ、其夜風烈ク雨急ナレバ、輕ク兵ヲ引揚ゲ、濱松ニ歸城シ玉フ、本多忠勝、人ヲ馳セ、濱松ノ城門ニユキ、公<sup>徳川家康</sup>今歸城ナリ、門ヲ開クベシト告ゲシム、是時内藤正成、足ヲ痛ミ、二俣ノ軍ニ從ハズ、城ノ留守タリ、是ヲ聞テ命ヲ下シ、堅ク門ヲ閉テ、敢テ開カズ、忠勝怒リ、門ヲ叩キ開ケト呼ドモ、曾テ聽ズ、正成櫓ニ登リ、火炮ヲ持シ、夜中何者ニシテ此ノ如キ、退カズンバ殺ント云、忠勝是ヲ神祖ニ告グ、神祖自ラ門ニ至リ、正成ハ居ズヤ、我今歸レリト宣フ、正成御聲ヲ聞キ、提燈ヲ揚ゲ見届奉テ、門ヲ開キ出迎ヘ奉ル、神祖大ニ正成ヲ賞シ、汝ニ城ヲ守ラセバ、敵虚ヲ謀リ攻ルコトアリトモ、侵スコト能ハズト宣フ、

〔備前老人物語〕松永<sup>秀久</sup>、信長公に戰まけて、自害におよばんとせしに、百會に灸していひしは、これを見る人、いつのための養生ぞやと、さこそおかしくおもふべけれど、我常に中風をうれぬ、死にのぞみ、もし卒爾に中風發して、五體心にかかせずば、臆したりとやわらわれなんざあらん